

労働科学の同伴者：桐原葆見 —経営学発展史に対する産業心理学者の貢献—

裴 富 吉
BAE BOO-GIL

日本における経営学の理論的な研究は、欧米における該当領域の研究に比較して非常に貧しい状況にある。本報告者は、1997年度分野別組織研究費によってすでに研究した労働科学者暉峻義等、すなわち日本の労働科学の開拓者・創設者に関して、経営学説史上の意義を解明し、同時に歴史的な評価を批判的におこなった。今回は、この暉峻とともに労働科学研究所〔大正10年倉敷労働科学研究所として創立〕の運営・発展におおきな貢献・寄与をしてきた同僚の桐原葆見の労働科学論を、歴史科学的な視点より本格的に究明する目標をかかっていた。

本研究によって闡明されたことは、以下のとおりである。

- 1) 桐原葆見が労働科学および産業心理学研究において占める重要な地位を確認できたこと。今日、日本の心理学界において桐原葆見の影響力は絶大なものがある。日本心理学会には桐原賞という「賞」があるくらいである。
- 2) とくに注目されるべき桐原の研究業績は、①女性労務管理問題に対する労働生理学の接近による大正末期からはじまった先駆的業績、②労働問題に対する産業心理学の接近による労働科学観の形成とその実践的指導である。
- 3) しかし、戦時体制期〔昭和12～20年〕において桐原が、戦争と学問との関連性をどのように踏まえ、理論展開と実践指導をおこなってきたかを観察すると、つぎのような事実が明らかとなる。戦争の時代、産業心理学の立場をもって労働科学の研究と普及に努力してきた桐原は、あの大東亜戦争に勝利するためにと高唱し、八面六臂の活躍をした。問題は、敗戦以後におけるこの心理学者の言動いかにあった。
- 4) 戦後になって、桐原自身がそれまで構築してきた労働科学の理論とこの実践への応用を、いかに回顧しつつ、その後につながる学問発展に関与してきたかなどを、当人および関係者の発言・証言を分析していくと、戦前—戦中—戦後のあいだにある厳然とした断層が指摘されねばならない。経営思想史上この論点はかっこうの研究課題である。
- 5) 以上の研究論材はすべて、心理学界はもちろんのこと、経営学界内でもまったくといっていいほど関心もたれていなかったものである。今回の研究成果は、現在執筆中であり、2000年度にはいつて刊行予定〔12月上旬目標〕の著作『労働科学の同伴者—産業心理学者桐原葆見の学問と思想—』にまとめ、公表されるみこみである。
- 6) 上掲書の主要な体系は、以下のような編成内容を想定している。参考にまでここに一覧しておきたい。

表 富吉『労働科学の同伴者－産業心理学者 桐原葆見の学問と思想－』

(BAE Boo-Gil, A Collaborator of Labor Science in Japan:

KIRIHARA Shigemi's Contribution to Industrial Psychology.)

－もくじ－

はしがき

第Ⅰ章 本書の検討課題－問題提起－

- ① 労働科学の特性
- ② 桐原葆見「主著」

第Ⅱ章 戦時期の主要な展開

第1節 真正なる「労務管理」論－『労務管理』昭和12年－

- ① 労務管理の定義
- ② 産業合理化

第2節 実践目的のための労働科学－『産業心理学』昭和13年－

- ① 実践科学「産業心理学」
- ② 戦争文化と労働科学

第3節 戦争用の労働科学－『戦時労務管理』昭和17年－

- ① 人的資源論
- ② 労務各論
- ③ 「半島人労務管理」問題
- ④ 「労働時間」問題
- ⑤ 「生活保全」「文化啓培」「女子労務」など

第4節 女性労働生理学の展開－『月経と作業能力』昭和18年－

- ① 戦争と女性
- ② 『月経と作業能力』公刊の意図
- ③ 『職業指導と労務指導』昭和13年
- ④ 戦時労働体制の関連

第Ⅲ章 戦後期の主要な展開

第1節 改竄の書－『産業安全』〔上野義雄共著〕昭和23年－

- ① 戦時と戦後
- ② 戦時勤労観
- ③ 桐原『労働と青年』昭和15年
- ④ 戦争認識

第2節 民衆の立場の労働科学－『生涯技術教育』1960年－

- ① 誰のための教育か
- ② 労働科学の任務
- ③ 戦時中に労働科学
- ④ 労働科学者の社会認識

⑤ 『生涯技術教育』1960年

⑥ 「勤労」ということば

⑦ 「能率」ということば

第3節 かくもかよわき労働科学－『疲労と精神衛生』1968年－

① 倉敷労働科学研究所創立の時代背景

② 労働を志向する労働科学

③ 戦時中の諸論稿

1) 「人的資源と労働教育」昭和14年3月

2) 「『新経済倫理』の実践－郷土産業の確立－」昭和15年5月

3) 「産業の再編成と労働科学」『国民思想』昭和15年8月

4) 「戦時労務管理の根本問題」『工業国策』昭和16年10月

第IV章 検討と批判－産業心理学史－

第1節 日本における産業心理学史

① 日本における産業心理学史

② 桐原葆見の位置づけ

第2節 産業心理学の実践科学性

① 労働科学の実践的問題性

② 実践科学としての労働科学

③ 戦争と科学者

第V章 労働科学者の経営労務論

第1節 産業心理学と労働科学

第2節 戦争と学問と責任

第3節 学問の責任と倫理